

秋季の長雨・日照不足による農作物への影響と対策について

茨城県農業総合センター 専門技術指導員室
結城地域農業改良普及センター

●影響と対策

1 普通作

【影響】

水稻では、収穫期の生育ステージのため長雨による影響が懸念される。

大豆では、湿害による粒の肥大不良、紫斑病・べと病の発生増加、青立ちの発生による成熟遅延が懸念される。

そばでは、湿害による苗立ち及び初期生育の不良、結実及び粒の肥大不良、成熟遅延が懸念される。

【対策】

(1) 水稻(収穫期の長雨への対応)

- ・倒伏が起きた場合には、未熟粒や穂発芽等の発生による品質の低下が懸念されるため、適期収穫に努めるとともに、被害稲は仕分けして乾燥・調製を行う。
- ・稲は、成熟期を迎えても長雨により水分含量が高く、整粒であっても軟弱になっているため収穫時に損傷粒の発生が無いように、こき胴の回転数を遅くする。
- ・刈り取った稲を長時間放置すると、変質の原因になるので、刈り取り後は速やかに(4時間以内に)乾燥機に張り込み、できるだけ早く送風を始める。
- ・乾燥作業は通風乾燥から始め、徐々に加温し穀温が40℃以下で乾燥作業を実施する。特に、急激な乾燥は胴割れの原因となるなど、品質や食味低下の危険性が高まるので行わないようにする。

(2) 大豆

- ・土壌の多湿状態が長時間継続すると、根腐れ等の湿害を引き起こすため、早期排水に努める。
- ・紫斑病の防除適期は開花期の20日後頃であるが、開花期から成熟期までに連続した降雨がある場合は、開花期の30日後に追加防除を行う。なお、2回目の防除は1回目とは異なるFRACコードの薬剤を選択する。

(3) そば

- ・大豆同様に、湿害防止のための速やかな排水に努める。
- ・播種直後の長雨によって出芽不良となっているほ場であっても、碎土率の低下や土壌の過湿といった降雨直後の悪条件下での作業ではさらなる生育遅延が予想されるため、無理な再播種は避ける。

2 野菜

【影響】

品目や生育ステージにもよるが、①土壌水分過多によって活着不良、根の機能が低下することによる草勢低下、生育初期の立枯れが起きる、②日照不足により光合成が充分に行なわれなくなり、草勢の低下や生育遅延が起きる、③高湿度や草勢の低下により、うどんこ病やべと病、さび病等の病害の発生が増える。

【対策】

(1) 野菜全般

- ・茎葉が軟弱徒長しやすいことから、施肥は控えめとし、灌水は天候や土壌条件、生育を確認しながら加減する。
- ・果菜類では着果過多を避け、可能な場合は早めに収穫して、株への負担を軽減する。
- ・苗床では、苗の間隔を充分に取り、採光性、通気性を良くする。
- ・曇天後に、急に晴れて高温強日射に曝されると、激しい萎れを起こすことがあるので、予報に応じて速やかに遮光を行なえるよう準備しておく。
- ・病害虫の発生が多くなるので、適宜下葉かきを行い、発生初期からの防除を徹底する。連続した降雨が予想される場合は、雨の合間を縫って防除を実施する。
- ・薬剤散布を行なう際、作物が軟弱な生育をしている場合は薬害を生じやすいので、使用基準の範囲内で散布濃度を低めにする等の配慮をする。

(2) 施設野菜

- ・施設内で湿度の高い空気が滞留しないよう、換気に努め、可能な場合は循環扇も利用する。

(3) 露地野菜

- ・地下水位が高いほ場や排水性が悪いほ場で定植を行う場合は高畦とし、可能な場合はマルチ栽培とする。
- ・生育期にほ場全体もしくは畝間に滞水した場合、排水路につながるよう溝を切る。
- ・イモ類は、長雨等で圃場に滞水すると塊茎腐敗を起こしやすいので、排水溝の設置等により速やかな排水に努める。
- ・毎年、排水が悪いほ場については、作が終了した後に排水性を改善するための処置を行う。

3 果 樹

【影響】

多湿条件下では病害の発生が助長される。収穫が終了した園地においても、病害による早期落葉は貯蔵養分の蓄積不良が懸念される。

【対策】

- ・病害の発生に注意を払い、病害虫参考防除例に準じて、雨の合間を縫って確実に防除を行う。また、病害虫発生予察情報を参考に病害虫の発生、被害防止に努める。
- ・収穫期を迎えている品目は、品質劣化を防止するため、適期収穫を徹底する。

4 花 き

【影響】

長雨により日照時間が不足すると、品目や生育ステージにもよるが、①軟弱徒長による生育不良、品質の低下、②根腐れによる立枯れ症状の発生、③灰色かび病やべと病、さび病等病害の発生、④花芽分化・開花の遅れによる需要期・計画出荷への影響等が懸念される。

【対策】

- ・病害が発生しやすくなるので、必要に応じて薬剤防除を実施する。
- ・日照不足による軟弱徒長で、品質の低下と灰色かび病等病害の発生が助長されるので、晴天時以外は遮光資材等を取り除き、できる限り日照を確保するとともに施設内の通気等を図り湿度を下げるように努める。